

# 丸子町郷土博物館



# 丸子町郷土博物館





## 丸子町郷土博物館の展示概要 ——序にかえて

日本の歴史や文化に対する関心は近年とみにつよまり、国内においても転換期の意識を反映してか自國の歴史・文化への関心が深まるばかりです。わが丸子町にもたくさんの貴重な文化財・文化遺産がありこうした時期に際し、郷土の歴史・文化に対する正確な知識と情報を提供する施設を設けることはきわめて大きな意義をもつものと思います。

丸子町郷土博物館（博物館）はこのような要望にこたえようとするもので数年来の準備を経て昭和57年7月着工し、58年11月開館を迎えました。

この博物館は人文科学系歴史博物館と位置づけ郷土の歴史文化を正しく理解するために必要な資料を収集し永く保存するとともに積極的な教育および研究活動を行って郷土の文化向上に寄与し社会教育の機能が充分発揮できるよう地域住民の積極的参画をはかるほか観光、産業、文化財等広範囲な分野との連携をはかり、さらに学校教育との連携も重視し、各小・中学校資料室との有機的結合をはかりたいと考えます。

展示は、常設・特別にわけ、常設展示の主要テーマは「丸子町を中心とした依田畠地域の開発史」とし古代遺跡の考古資料および町の発展の基礎となった製糸資料に重点をおき、年2回程度展示替えするよう配慮してゆきたいと考えます。特別展示は主として地域に密着したテーマを定めて随時実施し、将来は、野外展示も考慮に入れたいと考えます。

第一展示室には考古・歴史（旧石器～江戸）を、第二展示室には近代器械製糸（江戸末～現代）を展示しますが、複製品や復元模型、写真パネルやビデオなどを用い、できるだけ視覚的に内容を解説することによって一般にわかりやすく展示する方針をとり、観覧の方々がこの課題展示を通じて郷土の歴史・文化についての理解を深め、そこに人それぞれのあらたな問題を発見して学問的な興味を抱いていただけたら幸いと存じます。



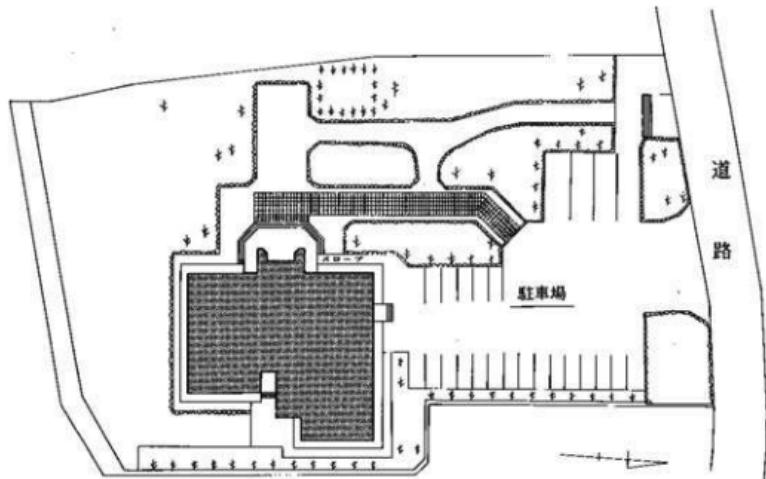
## 目 次

丸子町郷土博物館の展示概要	1
建物の概要	4
館内案内図	5
依田窪地方の自然環境	6
依田窪の文化財	8
依田窪の文化財所在地	9
第1展示室 考古	11
旧石器時代と和田峠の黒耀石	12
縄文時代と深町遺跡の呪術	14
弥生・古墳時代と社軍神遺跡の玉作	16
奈良・平安時代と諏訪田遺跡の官衙的 造構	18
中世城館跡と地域開発	20
鳥羽山洞窟と釋教	23
第2展示室 近代器械製糸	25
製糸業発展の基盤	26
初期の製糸業	28
全盛期の製糸業	30
生糸のできるまで	33
製糸労働者	37
製糸業の衰退と現在の丸子町	39
製糸業と丸子町の文化	42
利用案内	44
付近の観光	45
展示協力者一覧	46

## 凡 例

1. 本書は、丸子町郷土博物館の常設展示の理解のために作成しました。
2. 常設展示は、丸子町を中心とした依田窪地方の原始時代から近世までを、考古資料を中心に展示した「考古展示室」と丸子町で明治～昭和初期に栄えた器械製糸を展示了した「近代器械製糸展示室」の二つからなっています。
3. 収録した資料は、展示資料を主として扱っていますが、展示替えによって他の資料に変更されているものもあります。
4. 掲載されている写真や図版の縮尺は不同です。
5. 丸子町郷土博物館に資料を提供されたかたがた、ならびに協力してくださったかたがたについては、巻末に掲げてあります。

## 建物の概要



丸子町郷土博物館は、近代器械製糸業が盛んであった昭和3年に落成した、旧丸子町役場庁舎のイメージをとりいでつくれられています。内村街道沿いの、旧東内小学校跡地に建つ白亜の建物は、街道からよく見えるよう西に正面をもち、道ゆく人々にエキゾチックなその姿を印象づけます。

高い塔と正面玄間に配したステンドグラスは、「網織物と四季」「郷土の自然」をあらわし、ホールの壁面レリーフは、腰越測の上遺跡出土の中空土偶と、伸びゆく郷土を象徴しています。

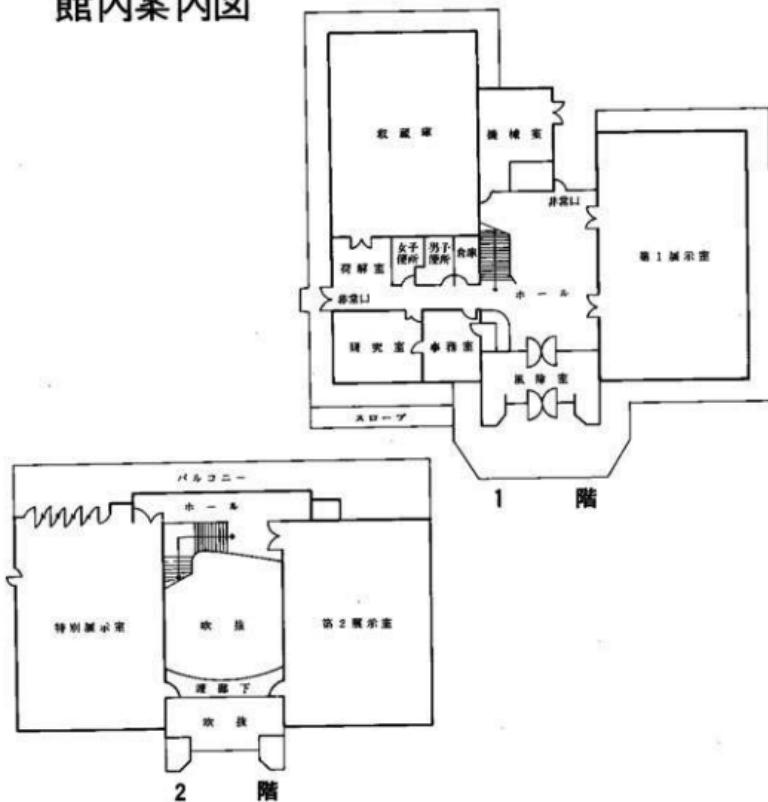
ホールには、館内における受付、案内、資料・特産品の売店が設けられています。

展示室は、一階に第一展示室、二階に第二展示室、特別展示室が配置されており、特別展示のない時は、講演会、研究会のほか、各種文化財会議等にも利用し、町民の学習活動に役立つよう配意しています。

## 施設の概要

敷地面積	4623.9m <sup>2</sup>
建築面積	921.02m <sup>2</sup>
建築規模	地上 2 階
構 造	鉄筋コンクリート
建 物 高	23.18m

# 館内案内図



## 展示室と展示のテーマ

### [第一展示室]

- みはるかす依田窯地方
- 旧石器時代と和田岬の黒曜石
- 縄文時代と深町遺跡の呪術
- 古墳時代と社軍神遺跡の玉作
- 奈良・平安時代と諏訪田遺跡の官衙的遺構
- 中世城館跡と地域開発
- 中世の文化
- 鳥羽山洞窟と曙光

### [第二展示室]

- 製糸業発展の基盤
- 初期の製糸業
- 全盛期の製糸業
- 生糸のできるまで
- 製糸労働者の暮らし
- 製糸業の衰退と現在の丸子町

# 依田窪地方の自然環境



依田窪遠景

## 上　た　く　ば 依田窪地方の自然環境

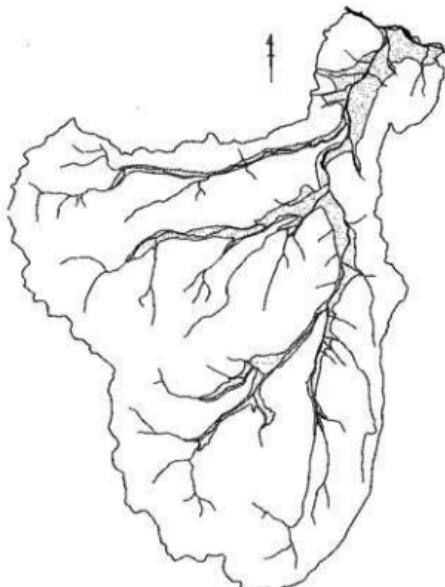
本州のほぼ中央、長野県小県郡の東南に位置する丸子町・長門町・武石村・和田村は、依田川ぞいにあり、通称「依田窪地方」と呼ばれています。

この地方は、フィッサ・マグナと呼ばれる日本列島を横断する大きな亀裂地帯の東辺部にあたり、しかも西南日本を縦断する中央構造線や糸魚川——静岡構造線の影響などもあり、極めて複雑な地形・地質・地体構造となっていますが、依田川——大門川のラインを境とし、西側の佐久郡とまったく異なる様相を示します。

すなわち、東側が、山頂高度が低く、著し

く平頂面が発達し、南方の蓼科火山帶の擦合<sup>せつあ</sup>いがゆるやかに展開して、八重原・御牧台地<sup>ごまきだいち</sup>を形成しているのに対し、西側は、火山活動の影響をうけて山頂の高度が高く、南方に1600~1800メートルの高度をもつ霧ヶ峰火山群、北に広大な溶岩台地の美ヶ原を中心とした和田峠・三才山峠に至る武石山塊、内村山脈、独鉛山脈などが交錯し、山また山の山地を形成しています。

千曲川の支流中、最大の水量と最長の流路を有する依田川は、蓼科山・大門峠・霧ヶ峰・和田峠・美ヶ原・三才山峠へと連なる広大な高原から流れ出る大門川・和田川・武石川・内村川の各支流を集め、途中、周辺の山地からの水をもあわせ、喬木型（高く大きな木



■ 谷平野

依田窪地方の谷・平野模式図

のような形)の樹枝状水系をなし、大屋付近で千曲川に合流します。

本・支流とも河谷にそって奥地まで細長く谷平野が連続し、人々によい居住地を与えるとともに、山間部の廊下の役割をはたし、往古より上田・佐久地方と中・南信を結ぶ、交通の要所ともなってきました。

谷平野は、丸子平野・長窪平野・内村渓谷平野・武石渓谷平野・和田渓谷平野・大門渓谷平野に区分できますが、最も広い丸子平野でさえ幅平均2キロメートル、長さ5キロメートルと、いずれも狭長ですが、奥地までよく水田化が進み、寒暖の差が著しい典型的な内陸型気候で、有数の寡雨(雨がすくない)地帯である当地方の人々の暮らしと依田川の

水が、きってもきれない密接なつながりをもっていたことがうかがわれます。

# 依田窪の文化財



依田窪の文化財分布図

# 依田窪の指定文化財

## 〔丸子町〕

西内枝垂栗自生地(国・天)  
法住寺虚空藏堂(国・重)  
鳥羽山洞窟遺跡(国・史)  
靈泉寺木造阿弥陀如来坐像(県)  
辰の口高塚(町・史)  
靈泉寺五輪塔(町・有)  
靈泉寺大樺(町・大)  
長泉寺板碑(町・有)  
竹ノ花五輪塔(町・有)  
岩窟古墳(町・史)  
枕状熔岩露出地(町・天)  
千手觀音像(町・有)  
文殊堂(町・有)  
安良居神社本殿・彫刻(町・有)  
尾野山三頭獅子(町・無)  
南方薬師堂(町・有)  
南方荒野板碑(町・有)  
尾野山式三番叟  
南方荒野びゃくしん(町・天)  
藤原田木造千手觀音座像(町・有)  
藤原田仏生誕・涅槃図(町・有)

## 〔武石村〕

弥勒菩薩坐像(村・有)  
聖觀音立像(村・有)  
石器(村・有)  
巴形銅器(村・有)  
日吉神社本殿(村・有)  
大宮社さわらの木(村・天)  
信廣寺のしだれ桜の木(村・天)  
武石(村・天)  
子擅旗神社の御柱祭の行事  
(村・無)  
トチの木(村・天)  
緑レン石(村・天)  
小寺尾のかつらの木(村・天)  
大布施の桜の木(村・天)

## 〔オコジョ(村・大)〕

モモンガ(村・天)

## 〔長門町〕

仏岩の宝鏡印塔(県)  
有坂獅子(町・無)  
子供獅子(町・無)  
大門神社(町・有)  
松尾神社(町・有)  
稻荷神社(町・有)  
豊受大神宮町(有)  
大門稻荷神社本殿高辻・鳥居  
の額(町・有)  
長安寺経蔵・輪藏經巻・格天  
井絵画(町・有)  
觀音寺本尊木造菩薩立像  
(町・有)  
西蓮寺本尊木造阿彌陀三尊立  
像(町・有)  
長久保宿旧本陣石合家住宅  
(町・有)  
長久保宿旧本陣石合家文書・  
絵画・古文書(町・有)  
長久保宿旧本陣石合家高札  
(町・有)  
竹内家住宅(並崎尾)(町・有)  
竹内家住宅笠取鉢立場國版本  
(町・有)  
竹内家宿場札版本(町・有)  
常福寺涅槃像掛軸(町・有)  
古文書・武田信玄朱印状依田  
記(町・有)  
おたや祭りの山車(町・無)  
長久保甚句(町・無)  
長久保城跡(町・史)  
一里塚(町・史)  
通夢道人遺跡(町・有無)  
チヨウゲンボウ繁殖保護地  
(町・天)

## 〔つきぬき草(町・天)〕

和田神社(村・有)  
八幡神社本殿(村・有)  
和田城主大井信定父子の墓  
(村・有)  
夜の池(村・史)  
一里塚跡(村・史)  
東餅屋(村・史)  
接待(村・史)  
男女倉遺跡(村・史)  
諫訪神社本殿(村・有)  
若宮八幡神社本殿(村・有)  
新海三社神社本殿(村・有)  
熊の神社本殿(村・有)  
木造愛染明王坐像(村・有)  
木造釈迦如來坐像(村・有)  
木造三宝荒特立像(村・有)  
木造地蔵菩薩坐像(村・有)  
恵林禪人臨川の偶(村・有)  
山水六曲屏風(村・有)  
異国人狩獵屏風(村・有)  
障籠(村・有)  
カヤの木(村・天)  
大枝垂桜(村・天)  
歴史の道(村・史)

※指定区分 「国」は国指定、「県」  
は県宝、「町村」は町村指定、「天」  
は天然記念物、「重」は重要文化財、  
「史」は史跡、「有」は有形文化財、  
「無」は無形文化財



法住寺虚空蔵堂（丸子町）



靈泉寺木造阿彌陀如來坐像（丸子町）



文殊堂（丸子町）



靈泉寺大櫻（丸子町）



仏岩の宝鏡印塔（長門町）



長久保宿旧日本陣石合家住宅（長門町）



おたや祭りの山車（長門町）



歴史の道（和田村）

## 第一展示室

### 考 古



二重底 (鳥羽山洞窟遺跡)

# 旧石器時代と和田岬の黒耀石

今から約1万年以前の時代は、第四紀洪積世という火山灰が堆積した赤土の時代で、歴史上、旧石器時代といっています。日本では昭和24年に、群馬県の岩宿遺跡が発見され、土器が作られる以前の歴史が明らかになりました。この旧石器時代は、約3万年以前を前期、約3万年前から1万年前を後期、次の棚文時代への過渡期を晩期としてわけています。長野県では昭和27年に、諏訪市の中白山遺跡が発見された最初に、今では約350ヶ所の遺跡が知られるようになりました。

旧石器時代の人たちは骨角器や打製石器を使って、主に狩猟生活をしていました。上水内郡信濃町の野尻湖立が鼻遺跡からは、ナウマンゾウやオオツノシカなどのたくさんの動物化石とともに狩猟に使われた打製石器が発見されています。そのほかの遺跡でもさまざまな石器が発見されていて、人びとが長い間かけて新しい技術や道具を開発してきたことがわかります。その石器の変遷をみると、前期では敲打器という原始的な、打ちたたくだけの石器が作られました。次の後期になると石器をつくり出す技術はいちだんと進歩し、ナイフのように切るための刃器が発達しました。続いて槍のように突くための尖頭器も現われました。晩期になると、細石器という細い刃をもつ小さな石片を組みあわせ、棒や骨



和田岬全景

角にはめて槍やモリとして使う高度な技術が発達しました。

こうして人びとは新しい文化をつくりだしてきましたが、石器の材料には黒耀石が好んで使われました。ガラスのように鋭く、加工しやすい性質をもっているためです。けれども、この石はどこにでもあるわけではなく中部地方では和田岬周辺が一大産地になっていて、遠くまで運ばれ、その範囲はおよそ240キロメートル四方におよんでいたようです。この和田岬周辺一帯には、黒耀石を採取する人びとが訪れてきて、道路をたくさん残しました。なかでも、和田岬の麓にある男女谷遺跡（和田村）や大門岬の付近にある鷹山遺跡（長門町）は、出土した遺物が豊富で規模の大きい遺跡として知られています。そして、黒耀石の産出地をひかえているこの依田嶺地方は、旧石器時代には黒耀石の交易路として、重要な意味をもっていたと想像されます。



男女倉遺跡群



鹿山遺跡群



男女倉B遺跡出土石器



鹿山第III遺跡出土石器



イ



口



ホ



ハ



二

石器の種類 (イ) ナイフ形石器 (口) 石刃  
(ハ) 捶器 (ニ) 形刻器 (ホ) 尖頭器

# 縄文時代と深町遺跡の呪術

旧石器時代も終り頃になると、寒かった気候も少しづつ暖かくなり、沖積世という腐蝕した植物などが堆積した黒土の時代を迎えた。それとともに、気候になじまなくなつたナウマンゾウなどの動物は減少はじめ、人びとも新しい環境に適応して生きるために、新しい道具の開発にせまられていました。その結果、植物を煮るための土器や、歯しようになったシカ・イノシシなどの小動物を射るための弓矢が発明されました。今までのくらしに一大変革が訪れたのです。新石器時代の始まりです。日本ではこの時代を縄文時代といい、約一万年間続き、土器やくらしの特徴から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六つの時期にわけています。

草創期と早期は旧石器時代の終りから6千年前頃まで続きました。この頃はまだ少人数で移動し、尖底土器を使い、狩猟中心のくらしをしていました。南佐久郡北相木村の棚原岩陰遺跡に住んでいた北相木人はよく知られています。丸子町でも平井寺坂下遺跡から尖底土器片が発見されています。次の前期と中期は今から4~5千年前にあたります。このころは栗・どんぐりなどの植物性食料も積極的にとり入れたため、くらしはかなり豊かになりました。人口が増え、集落も大きくなりました。特に諏訪地方の八ヶ岳西南麓では中期の集落がもっとも発達し、依田畠地方でも遺跡がふ



深町遺跡

えています。土器は定住にふさわしく、装飾にとも平底の土器になりました。

しかし、3千年前の後期や晩期になると、気候が寒くなつたため植物採取がうまくいかなくなり、サケ・マスなどの漁労に頼るくらしに変わりました。そして、くらしが不安定なため、遺跡の数は少なくなり、呪術がさかんに行われました。また、土器は沈線文様の精巧なものが作られました。丸子町では鳥羽山洞窟で晩期中ごろの敷石住居が発見され、その上遺跡では晩期末ごろの中空土偶が発見されています。さらに、昭和54年には深町遺跡が発掘調査され、この時期の様子を知るうえで注目されました。この遺跡は、縄文中期や平安時代が重複していますが、晩期ではたくさんの土器や石器のほかに、呪術に使われた土製品や石製品、あるいは配石構造なども発見されており、日常生活だけでなく、縄文人の信仰やものの考え方などもうかがうことができます。

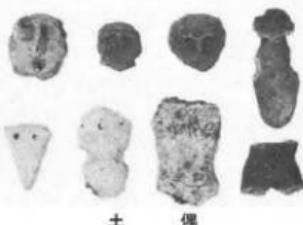
——深町遺跡出土の土製品——



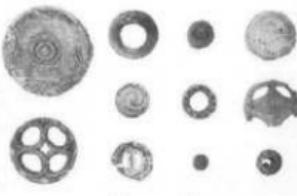
埋甕遺構



人骨出土状況



土偶



栓



ミニチュア土器

三角墳土製品

——深町遺跡出土の石製品——



磨製石斧



打製石斧



石冠



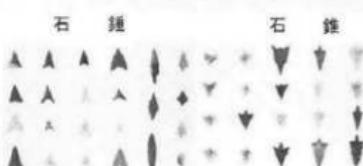
石錘



石錐



石劍・石刀



石錐

やよい こふん しゃぐじ たまつくり

# 弥生・古墳時代と社軍神遺跡の玉作

今から約2300年前ごろに、大陸から鉢と金属器が伝わってきました。北九州ではすでに櫛文時代の終りごろに櫛が発見されています。今まで日本になかった米作りの時代を迎えたのです。この時代を弥生時代といい、前期・中期・後期にわけています。長野県に弥生文化がひろがるのは中期になってからです。依田窪地方では、巴形銅器が出土した武石村の上ノ平遺跡のはかは、これといった遺跡は発見されていません。このあたりに米作りの集落ができるのは、次の古墳時代からです。

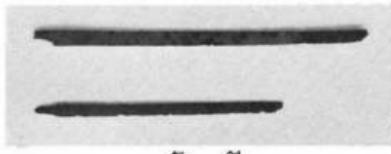
古墳時代は、米作りでうまれた豪族を、大和朝廷が統一していった時代で、4世紀から7世紀のころにあたります。権力者の墓である古墳やその副葬品に象徴される時代でもある

ので古墳時代といわれています。このころの人びとは、弥生式土器の系統をうけつぐ土師器や、後に大陸から伝わってきた、窯で焼く須恵器を使っていました。この時代を前期（4世紀）、中期（5世紀）、後期（6・7世紀）にわけています。依田窪地方に古墳が築かれるようになったのは遅く、後期になってからです。けれども、鳥羽山洞窟では、すでに中期には洞窟を利用した豪族の墓が発見されており、古墳を築かない独特な葬法をもつ豪族がいたと思われます。

一方、古墳時代の人びとがくらしていた集落は、依田川の下流域に早くから発達しました。ここには広い河岸段丘がひらけ、いくつかの集落がみられます。なかでも、昭和



巴形銅器



鐵劍



環管玉

勾玉



高塚古墳



越



提瓶

——池の平古墳副葬品——

55年に発掘調査された社軍神遺跡では、前期から後期にいたるたくさんの竪穴住居が発見されました。古墳時代の人びとも縄文時代や弥生時代の人びとと同じく、竪穴住居に住んでいたわけです。しかし、この遺跡はそればかりでなく、集落内に玉作の工房をそなえていたこともわかりました。工房は前期の竪穴住居の中に、簡単な施設をもうけたものです。ここでは、この地域でとれる緑色凝灰岩（グリーンタフ）を材料にして、祭事や古墳の副葬品に使う管玉や切玉・鎌形石製品などを作っていたことがわかりました。

のことから、社軍神遺跡の集落には米作りの農民ばかりではなく、玉作の専門技術者もいたことがわかります。



社軍神遺跡



社軍神遺跡玉作工作ビット



管玉未成品(側面打製作工程)



鉋鋸車・小玉・勾玉



亀甲状石



管玉未成品(研磨工程)



鎌形石製品と未成品



勾玉未成品



管玉未成品(穿孔工程)・完成品



砥石



土器



須恵器

——社軍神遺跡出土品——

# 奈良・平安時代と諏訪田遺跡の官衙的遺構



信濃國分寺跡



諏訪田遺跡木柱跡



(上) 土師器



(下) 須恵器

645年の大化の改新によって成立した律令国家は、701年の大宝律令でいちだんと強化されることになりました。東山道の一国として信濃國がおかれ、その下に10郡67郷が整えられたのもこの頃といわれます。政庁のある國府は、後に松本に移りますが、初めは上田の地におかれ、國府の近くには国分僧寺と尼寺が建立されました。律令国家にとって信濃國は、東北地方の蝦夷を征服する前線基地のような立場にあったので、馬を飼育するための牧場経営などが重要視され、東山道は中央と結ぶ役割をはたしていました。

信濃の政治の中心となった小県郡には、童女・山家・須波・跨部・安宗・福田・海部の7つの郷がおかれました。このうち、海部郷は依田川の下流地域にあったとされています。事実、古墳時代以後の依田塹地方の遺跡は、依田川の下流地域を中心に発達しており、このあたりに古代の郷というような単位のまとまりがあったことは十分推測されることです。

依田川の下流地域にあるこのころの遺跡の一つ諏訪田遺跡は、昭和55年に発掘調査され、奈良時代の、掘立柱をもつ建物跡やたくさんのがれいわらびの布目瓦が発見されました。掘立柱の建物跡は一般的な竪穴住居と異なり、規模が大きく、明らかに集落の中心をなす建物であったといえます。それに加えて、当時は寺院などの特

別な建物にしか使われなかった布目瓦が発見されていることなどから、諏訪田遺跡は「海部郷」の官衙（役所）跡ではないかとも考えられています。

周辺の深町・中城南遺跡で竪穴住居の集落群跡が発見されており、また、山麓にはこの地域の日常容器類の生産を行った須恵器の古窯跡群が、確認されています。そして対岸の

塩川とならんで依田条里遺構の水田もみられ、

このあたりが奈良・平安時代に栄えていたことがうかがわれます。



灰釉陶器



依田古窯跡 分布図

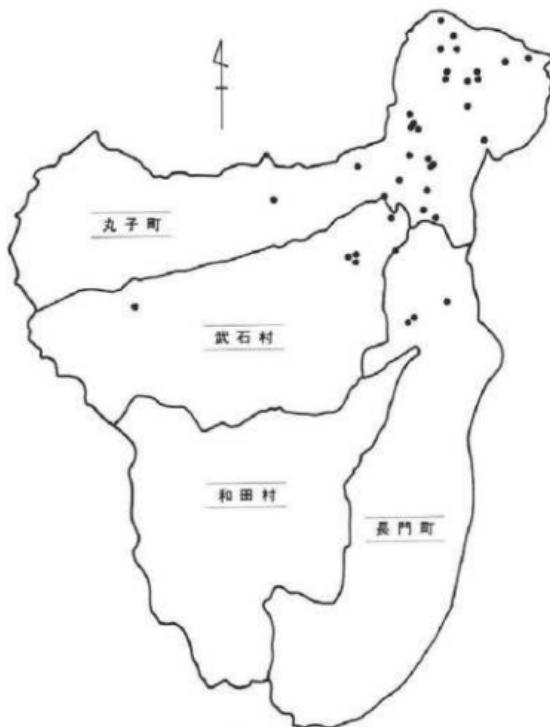
## 中世城館跡と地域開発



依田城（A・Bの両説がある）

平氏を滅亡させた源頼朝が朝廷から征夷大將軍に任命され、鎌倉に幕府を開いてより後、

江戸時代が終わるまでの約700年間は、武家を中心とした政治がおこなわれました。領地をめぐって主従の間に、御恩と奉公の関係が結ばれ、武力をもった支配者が農民から年貢や労役を取りたてるようなしきみをもった時代を封建時代といいます。そして鎌倉・室町・安土桃山・江戸と続く封建時代のうち、鎌倉・室町時代を中世と呼んでいます。



依田郡の城館分布図

封建時代の経済のもとは米でしたから、支配者は水田面積をふやすことに心をくばりました。そのためこの時期の水田面積は大はばにふえ、記録によると江戸時代の中頃には、現在の姿ができあがったものといえます。しかし一般農民のくらしは、なお苦しいものでした。

平安時代末、源義仲は、平家討伐のため丸子町御嶽堂城山山麓の依田館を本拠として挙兵したとされています。これは依田庄あるいは塙川牧を背景として勢力を張っていた、依田・丸子・長瀬氏などの招請があったほか、この地が兵馬、兵糧の調達に適し、絶好の地理的条件をもっていたことによると考えられています。

義仲滅亡後、義仲に従ったこの地方の武士

は、再びこの地方に戻ってきましたが、源頼朝はこの地方を重視して付近に守護所を置きました。そして北条氏が実權を握った後、連署北条義政（塙田北条氏の祖）が塙田平（現上田市）に館を置いた頃には、上田・小県地方は信濃の文化の中心になっていたものと思われます。その後、塙田北条氏の滅亡・所領支配者の入れ替わりなど、この地を舞台に武士が争いをくりかえしました。

この地方の至る所に、その時代の勢力者の残した城館址や寺社などがあり、ことに鎌倉時代の国宝・重文を始めとする文化財が数多く残されています。

この時代、地域の開発は更に大規模に、そして奥地まで進められ、条里計画水田もなされたので水田面積はおおはばにふえました。



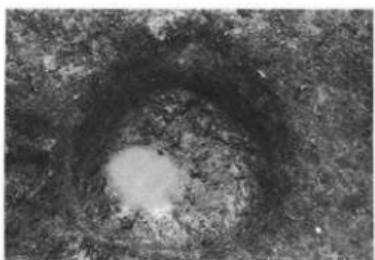
丸子城



鳥屋城

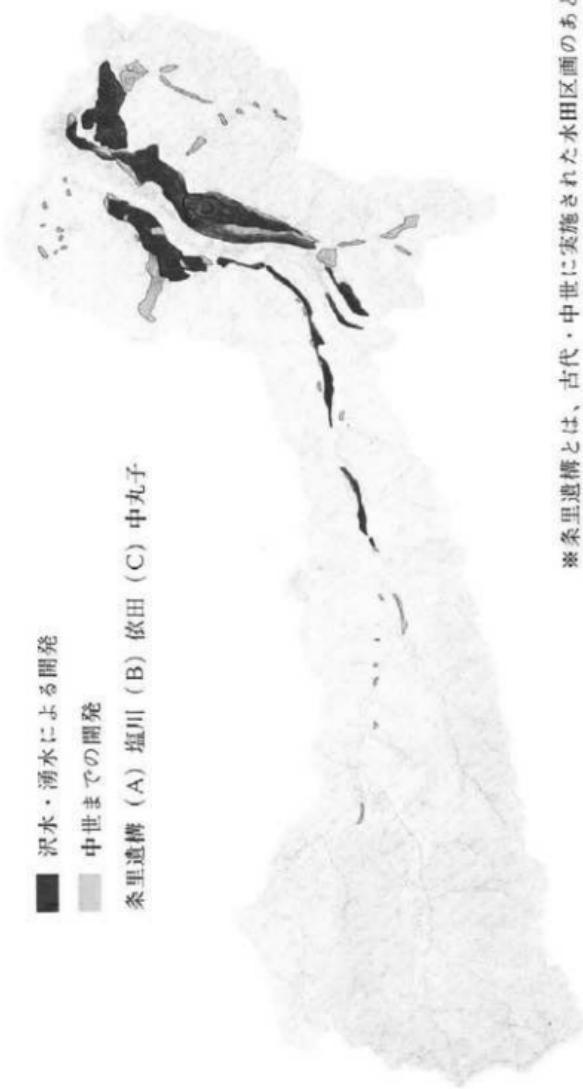


福羽北遺跡 鋳冶跡



福羽北遺跡 鋳冶土塙

## 条里遺構と地域開発の手順



※条里遺構とは、古代・中世に実施された水田区画のあとをいい、依田川・内村川から取水される長大な用水路の水を最も有効に利用する方法です。

# しせきとばやまどうくついせきばくそう 史跡鳥羽山洞窟遺跡の曝葬

鳥羽山洞窟は長門町と武石村の境界に近い  
丸子町腰越地区にあり、武石川が依田川に合流する名勝「飛魚」付近の右岸に接しています。このあたりは鳥羽山の岩肌が多くみえ、その中でひときわ大きな口をあけているのがこの洞窟です。洞窟の規模は幅約25メートル、奥行約15メートル、高さ約15メートルもあります。

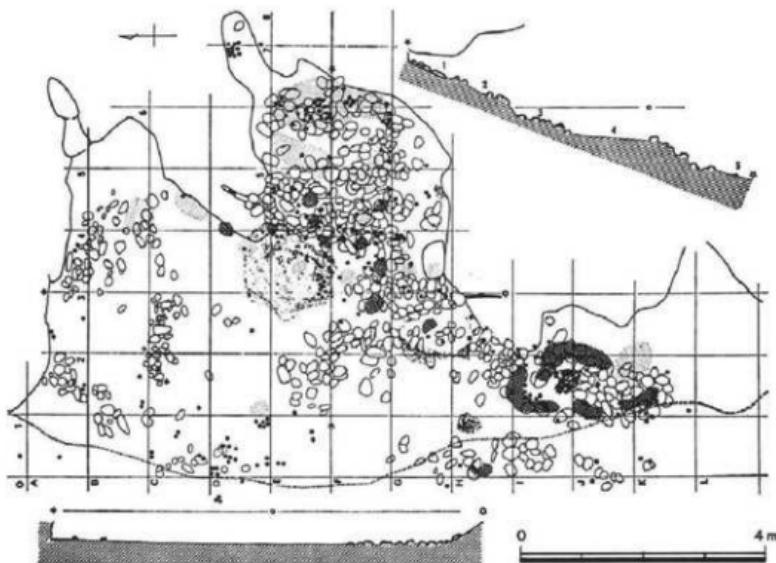
昭和41年から3か年にわたる発掘調査を行い、その結果、洞窟が縄文時代から使われ、その後、5世紀中頃には古墳を榮かなかった豪族の墓所として使われていたことが明らかになりました。墓所は風葬に似た特殊な葬りかたをしており、この葬りかたを睡葬とよぶことにしました。

この葬葬は、洞窟内に依田川の河原石を三



鳥羽山洞窟遺跡

段の石段状に敷き、その石敷きの上に屍体をおいた状態で葬っていました。このほかに、主に脛骨を集めて束ねた集骨、頭蓋骨などを焼いた骨焼きも行われていたことがわかりました。さらにこれらの人骨に伴って、須恵器の二重底・カップ形土器はじめ、琴柱形



鳥羽山洞窟遺跡遺構図

石製品・石鉗・鹿角装刀子などの優れた副葬品も出土し、葬られた人びとがかなり有力な豪族であったことがうかがわれます。

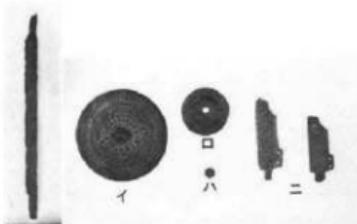
古墳時代に古墳を築かないで、独特の葬法をもっていた豪族とは、一体どのような集団であったのでしょうか。今のところ、依田宮地方ではそれをうかがうような集落の背景がみあたりませんので、おそらく外部、それも中央の先進地域から移動してきた可能性も十分考えられます。

なお、岩谷堂洞窟でも鳥羽山洞窟と同じく古墳時代後期（6世紀ごろ）に麻薙を行なっていたことが出土遺物などから推測されています。

鳥羽山洞窟遺跡は、昭和53（1978）年に国史跡に指定され、現状保存されています。



岩谷堂洞窟遺跡

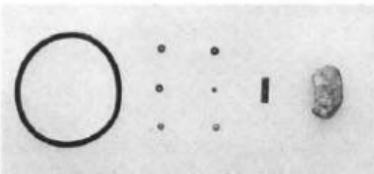


鐵劍(イ)鏡(ロ)紡錘車(ハ)小玉(ニ)滑石製刀子

——岩谷堂洞窟遺跡副葬品——



石鉗・琴柱形石製品



銅鉗・臼玉・管玉・滑石製勾玉



馬具



鹿角製紡錘車



鹿角装刀子



鐵劍



左上：二重瓶・左下：カップ形土器・右：甕

——鳥羽山洞窟遺跡副葬品——

## 第二展示室

### 近代器械製糸



## 製糸業発展の基盤

三世紀に百濟よりもたらされた養蚕及び絹織物の技術は、その後、信濃国へも伝えられ、平安時代には、糸・絹の納入国として「延喜式」に記載されるまでになります。けれども、質実剛健を重んじる武士の世になると衰退していきます。

しかし、江戸中期になると、あいついでなされた輸入制限により、安土・桃山時代以降続いた生糸の輸入がとだえ、また元禄文化の影響もあり、生糸の需要が増加しました。米を経済の基盤としていた江戸幕府は、本田・本畠への桑の植付けを禁止していましたが、信濃国では、田畠として利用できない河原の荒地や、山腹の傾斜地を多くもっていたので、禁止令に違反することなく桑園を設けることができました。このため信濃国では、再び蚕糸業が大発達することとなります。

安政6年(1859)の横浜開港以後は、ヨーロッパの主要蚕糸国であった、フランス・イタリアの養蚕が、黴粒子病の蔓延により壊滅したこともあるて蚕種や生糸の輸出が急増し、ますます桑園の開拓が進みました。また、田畠への栽培禁止令の緩和や養蚕の収益の良さもてつたって、平坦部が一面桑で覆われま

した。

ことに上田・小県地方は、明暦元年(1655)ごろ、丸子町の依田川沿岸數10haが開墾され桑の植付けが行われたのを最初に、信濃国で最も早く蚕糸業が発達しました。上田には、生糸を扱う豪商もあらわれました。そして明治初期には、この地方の生糸生産高は長野県全体の約半分を占めるなど、生糸の一大産地となります。また、それにともない蚕糸業も発達し、天保年間(1830~1843)には、本場奥州をしのぐほどになりました。

江戸時代までの生糸は、農家の副業として行われ、一軒の農家で桑の栽培から蚕の飼育・糸とりまでのすべてをしていました。しかし、生糸の需要が増えてきたので、丸子にも室内工業的な製糸工場を営むものがあらわれてきます。明治初期、長瀬村につくられた「摩羅」による工場は、こうした例の1つです。

しかし、このことが明治政府のすすめで西欧から導入された「洋式器械製糸」がスムーズにこの地方にはいらない原因ともなりました。

1. 養蚕の守り神



1



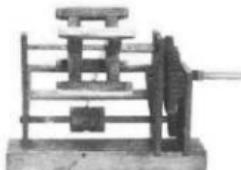
2

3. 座縫器

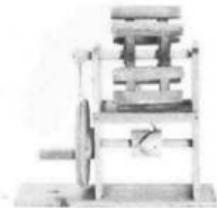
上：右手廻し 右手で歯車を回し、左手で糸を挽いた

下：左手廻し 右手握りよりも進歩したもので、右手で添縫など重要な作業ができるようになつた。

4. 揚返器（初期）



3



4

## 5. 下村龜三郎

## 6. 三製糸場工場

## 7. 足踏式座縫器械

座縫器と比べ、足を動力として使うため両手が解放され、作業能率が向上し、糸質も良くなった。家庭用の簡便縫糸器として、戦後まで使われた。

## 初期の製糸業



5



八百石場 織 製 三

一四一萬は万葉の御代なり

6



7

長野県における洋式器械製糸工場は、明治5年の上諏訪（現諏訪市）の深山田製糸場を最初に県下各地につくられています。けれども、上田・小県地方は県下一の蚕糸業の中心地であったにもかかわらずほとんどつくられませんでした。これは、当時の器械製糸が小規模で、従来の座縫による製糸との差がなく、導入する必要があまりなかったことによります。しかし、洋式器械製糸は、本糸、大量に均一の糸がとれるというメリットをもっており、製糸機械の進歩、工場の大規模化、協同販売のための結社の結成などにより、原価・品質の両面で座縫製糸を圧倒していきます。こうして、次第にこの地方においても、洋式器械製糸を導入する工場が増えてきました。

丸子の洋式器械製糸工場は、明治22年下村龜三郎を中心創設された、足踏式縫糸器による工場が最初です。しかし、この工場は小規模であり、一工場の生糸だけでは一定量の「荷口」（荷の量）をまとめることができず、商取引では不利でした。そこで明治23年、岡谷の例になら、共同販売のための結社「依田社」が設立されます。また、品質の不純

## 8. 依田社

## 9. 模範工女養成所

一をさけ、このころの主な輸出先であったアメリカ市場に有利に出荷するため、各小規模工場の生糸を協同で揚返しすることとし、依田社内に再縫場を設けました。

その後、製品検査の共同化、繭の共同購入など、効率のよい経営をするとともに、軽便鉄道の布設、模範工女養成所や病院の設立をし、共同販売のみならず、関連事業の創設や環境整備も、積極的に行いました。

明治41年には依田社と同様の働きをもつ「旭社」も設立されています。

しかし、「製糸」は「生死」ともいわれ、よい繭を安く買い、高い相場のときに糸を売るという極めて投機的なものでした。これは繭の品質によって、糸目や能率がほとんど決定されるうえ、生糸価格の約8割は繭の購入費で占められることになります。そのため、共同結社を構成する各製糸工場は浮き沈みが激しく、その発展は決して順調なものではありませんでした。



8



9

## 全盛期の製糸業

20世紀にはいり世界一の絹織物産地となつたアメリカの絹工業は、機械的生産方法を全面的に導入して、大量生産へと進みました。そのため、フランス・イタリアのように優良な細糸でなく、低コストで均一の太糸を大量に必要としました。この条件にあった日本の器械製糸の糸は、明治40年ごろから輸出が急増します。そして、アメリカの絹工業の高度化にともなって、生産のはとんどを輸出でしめる日本の製糸業にも、質的向上、機械化が求められるようになりました。

このことは、良い繭を得るための養蚕農家・養蚕組合との特約取引や、縫糸・再縫法の改良、検査の充実などを積極的に進める結果となりました。また、資本主義の発達とともに、女子工員の賃金も上昇したため、製糸家はより積極的に機械化を進めなければならなくなりました。しかし、丸子が共同結社のお手本とした岡谷では、早くから結社は解消されていて、片倉組や山十組などの大製糸家が輩出していました。そこで資本の少ない丸子の製糸家は、共同結社「依田社」・「旭社」を中心に近代化を進めました。

ことに「依田社」は、下村急逝後、二代目

社長となった工藤善助により、大正3年、産業組合法に基づく「有限責任販売組合依田社」と組織を変更されてからは、一層の技術・検査の向上、機械化に力を注ぎました。この間、依田社式の縫糸機や機械類を開発したほか、アメリカへの生糸の輸出も積極的に進めました。

こうして、丸子の製糸業は、全盛期を迎える生糸生産額は、明治末から昭和初期にかけ飛躍的に増加しました。

また、製糸業の隆盛にともない、人口が増え、町制が施行されたほか、文化・産業・経済の機関や施設が急速にととのえられ、丸子町は上田市とならぶこの地方の中心として栄えました。

## 10. 丸子における製糸釜数及び 生糸生産額累年比較 「依田社要覧」より作成

### 11. 特許 YD式各種機械

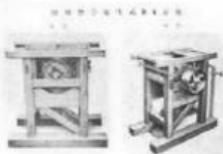
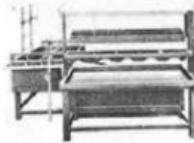
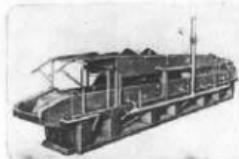
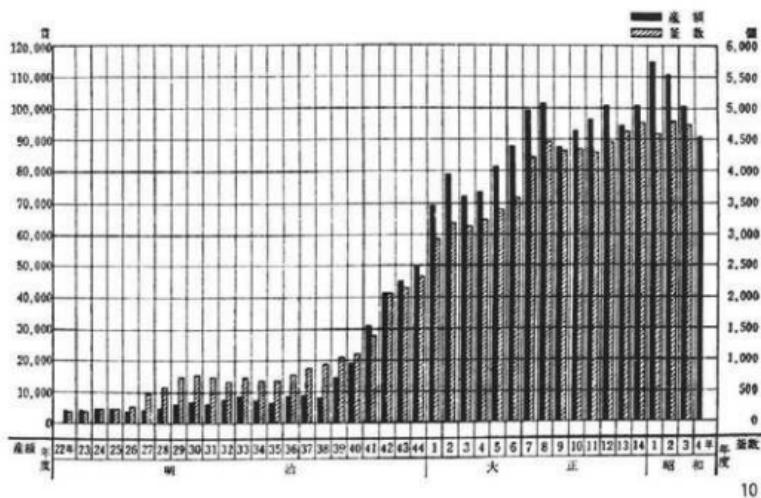
YD式各種機械は、依田社技師佐藤全六によって発明された。

左上：特許 YD式煮糸機（A型）

左下：特許 YD式煮糸機（B型）

右上：特許 YD式浸透機

右下：特許 YD式生皮苧整理機



## 12. 製糸業全盛期（明40～昭3）のおもなできごと

明治	○丸子に電話局開設（県下で2番目）	(明40)
	○丸子瓦斯会社設立	(明41)
	○丸子織糸株式会社創設（県下で最初）	(明42)
	○依田社病院設立	(明43)
	○丸子に電燈点る	(明44)
	○丸子農商学校（現丸子実業高等学校）開校	(明45)
大正	○町制施行丸子町となる	(大元)
	○丸子軽便鉄道会社創立	(大5)
	○丸子劇場開場	(大6)
	○依水館の建築（依田社の迎賓館）	(大7)
	○信濃組糸紡績会社創設	(大7)
	○軽便鉄道開通（丸子——大屋間）	(大7)
	○Y D（依田社）式蒸瀧機特許許可	(大11)
昭和	○丸子農商学校県立となる	(大11)
	○米国紡業協会会長ゴールドスミス丸子町視察（大12）	



丸子ではじめての電燈



丸子劇場



軽便鉄道開通式



依田社病院

## 生糸のできるまで

繭を処理して繭糸を引き出し、それを数本合わせ、さらに巻きとつて整理をする一連の作業を「製糸」といい、こうして作られた糸を「生糸」と言います。

この製糸は江戸時代末ごろまで、農家の副業として養蚕と一緒に行なっていました。しかし、製糸業の確立とともに独立し、さらに洋式器械製糸の導入・発達にともない、工程も分離していきます。丸子の器械製糸の全盛期、大正時代の製糸工程は、大体次のようでした。

(1) 繭の乾燥——蚕は、繭を作り終わったら、17~19日たつと発蛹します。こうなると生糸が織れなくなるので、繭を乾燥させ中の蛹を殺しました。繭の貯蔵と殺蛹を行なう丸子倉庫もありましたが、大多数の工場では自工場内に乾燥室をもち、そこで処理をしました。

(2) 繭糸——次に乾燥した繭を煮ます。これは、当初煮ながら糸を織ったのが一括して煮るようになりました。煮た繭は、熱湯を満たした繭糸鍋に浮かべられ、女子工員によって糸が織られました。糸口をみつけるのには、実子筈が用いられました。また、繭糸一本で

は細すぎるため、何本かの糸をより合わせて目的の太さの糸にして織りました。このよりかけ装置には、イタリアのケンネル式が使われました。

(3) 再繭(揚返し)——小枠に巻きとられた糸はまだぬれており、放置すると糸に付着したセシリノのため、くっついてしまいます。そこで、織糸した糸を大枠に巻きかえる作業が行われました。この揚返しは、依田社加盟工場のものはまとめて依田社で行いました。

(4) 荷造り・出荷——大枠に移しかえられた糸を紹といい、70gが標準でした。この紹を30本の束(括)にし、さらに20括の俵詰め(約60kg)にして、輸出しました。

(5) 検査——品質は特に重視され、糸量・織度・色沢等さまざまな検査が行われました。

13. 集 荷

14. 取引場

15. 右：藺かご  
左：藺枡（二斗）

## 集 荷



13



14



15

16. 乾 燥

17. 選 別

18: 煮 蘭

## 乾燥・選別・煮蘭



16



17



18

19. 緑糸場

20. 依田社（YD）式緑糸鍋

21. 緑糸場風景



19



21

22. 上：再緑場内部

下：再緑用大枠

23. 緑造りのようす

24. 上：括造りのようす

下：括造器

## 緑 糸 再緑・緑造り・括造り



22



23



24

25. 荷造り

28. 生糸商標

26. 洋 傑

29. 糸量・織度検査

30. 色沢検査

27. 生糸の輸出風景 (横浜港)

31. 切断検査

32. 類節検査

## 出 荷

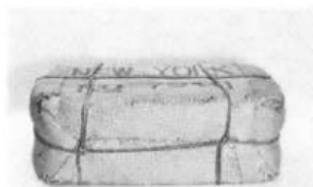


25



28

生絲の器械検査  
Conditioning of Raw Silk for Export.



26



29



30



27



31



32

### 33. 運動会風景

### 34. 講習会のようす

## 製糸労働者

器械製糸の導入に伴い、丸子にも製糸労働者が出現します。

製糸家は、利益を上げるために、生糸価格の約8割を占める繭の購入費をおさえることと同時に、労働力も安く手に入れようとしました。したがって、初期の労働者の賃金は低く、また、労働時間も一日、13~14時間と長いものでした。さらにこのころの製糸工場は規模が小さく、機械化も充分進められていないこともあって、女子工員の手作業に負うところが大きかったです。このように労働条件は極めてきびしいものでした。

しかし、器械製糸が全国的に発達し、工場の規模が拡大する明治末ごろになると、日本資本主義の発達に伴い、全国的に労働者が不足し、確保が困難となりました。とくに、製糸業は、繭の生産と流通の面から季節的操業であり、製糸労働者の9割を占める女子工員は、一般に、3月~12月までの10ヶ月だけ出稼ぎをする近隣の農山村の若年女子がほとんどでした。そのため女子の奪い合いがおこり、高価な贈物を与えて勧誘するなど、募集競争が激しくなったため、県外からも集めるようになりました。



33



34

### 35. 小県地方製糸工場の女工出身都市調べ

(注) 長野県生糸同業組合連合会編「製糸工場調べ」による。

36. 小県地方器械製糸工女年令別調べ

(注) 長野県生糸同業組合連合会編「製糸工場調べ」による。

こうして女工払底の傾向が強まるにつれ、次第に労働条件が改善され、慰安娛樂会や運動会、模範工女の表彰なども行われました。また賃金も上がり、大正の中ごろには労賃の上昇率が糸価の上昇率を上回るようになりました。そこで製糸家は、生糸の質の向上と収益を上げるためにも積極的に機械化を進めなければならなくなりました。

大正期の製糸労働者の就業時間は、午前6時から午後6時までの12時間が一般的で、休

憩時間は、午前・午後に各15分、昼食時に30分が当てられました。

出港都市	南佐久	北佐久	小界	諏訪	上伊那	下伊那	西筑摩	東筑摩	南安曇	北安曇	更級	埴科	上高井	下高井	土木内	下水内	長野	松本	上田	計
大正7年	403	991	4794	5	1	1		147	11	2	588	460	71	76	217	41	31		7839	
大正11年	427	1015	4818	29	25	25		162	35	26	612	484	95	100	241	65	55		8214	
昭和7年	172	390	2557				22			6	172	206	31	121	95	105	31		150 4058	

35

年 代	15	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	計			
大正 7 年	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	8340
大正 11 年	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	7092						
昭和 7 年	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	30	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	4115			

36

## 製糸業の衰退と現在の丸子町

昭和4年（1929）、ニューヨーク株式市場の大暴落をきっかけとして始まった世界恐慌は、アメリカの絹需要を急激に減退させ、全面的にアメリカ市場に依存していた日本の製糸業に大打撃を与えた。加えて、人絹の急速な進出や、中国産生糸・高価な歐州産生糸の価格低落による日本生糸の市場占有率の減少なども、いっそう打撃に拍車をかけました。

このため、製糸家がつくる蚕糸業同業組合中央会を中心に、全国的規模で生糸の共同保管や操業短縮を実施しました。さらに政府も資金援助や滞貿易の買い上げなどの援助を実施しました。しかし、製糸業の不況は長く続き、この間、中小はもちろん大企業の倒産も相次ぎました。そして次第に国家の統制が強まってきた。

丸子町の製糸業は、当初からアメリカ向けの生産にあたっていたので、その打撃は深刻で、工場の倒産・賃金の不払いなどが続出しました。また、普通の烟を桑烟にして養蚕經營をする農家も多く、地域全体が製糸に密接に関係していたため、その影響はたいへん大きく、社会不安をひきおこしました。

こうした中で、国家主導の合理化、再編成が進み、工場数・多數とも減りますが、太平洋戦争が始まると、製糸業は戦時体制に不要不急のものとされ、工場は次々と軍需工場に転用されました。ここに生糸の町といわれた丸子の製糸工場は、ほとんど姿を消してしまいました。

終戦後、日本経済はめざましい復興をとげました。岡谷をはじめとする県内の製糸業地帯では、疎開していたかつての軍需産業がもととなり、光学・通信・機械工業を中心とする新しい工業地帯に変わりました。しかし、丸子では、納糸紡績を除いては、かつての製糸工場は全く利用されず、新たな工場が入ってきて軽工業の町へと変わっていきました。

### 37. 丸子町器械製糸工場の設立・廃止一覧

所 工 場 名	年	明治 20 21 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50	大正 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50	廃業後の利用状況	
				新設	現存
飲 田 社					
旭 社					
その 他					
運転工場数	0 1 7 10 22 23 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 21 22 25 30 35 12 13 10 6 5 1 1 3 4 4 0 4 8 17 23 23 23 22 22 21 23 23 25 22 22 23 24 22 26 28 22 22 25 22 18 14 11 11 10 10 6 1 1 3 4 4	4 3 3	1		

36. 現在の絹糸紡績工場

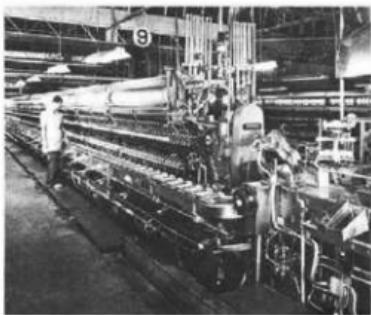
39. 現代の製糸工場

40. 製糸業全盛期の丸子町 (大正14年)

41. 現在の丸子町 (昭和54年)



38



39



40



41

## 42. 丸子陳列館

## 43. 収集された美術品の例

渡辺華山筆

「花鳥図」紙本着色 70×54cm

## 製糸業と丸子町の文化



42



43

製糸業の発達により、製糸家のみならず地域全体がうるおうこととなりました。街は活気に満ち、生糸の取引を通じ交流のあった横浜やアメリカの文化が直接もたらされました。

製糸家の援助により、明治44年中央から知名の士を招き講演会を催し、一般に公開聴講させるという、現在の信州夏期大学と同様な「依田座教育会」が発足したのを始め、45年には組合立の「丸子農商学校」（現・県立丸子実業高等学校）が開校、製糸業が全盛を迎える大正時代にはいると、2年に丸子小学校（現・丸子中央小学校）へ、この地方で最も早く、現博物館の前身ともいえる「丸子陳列館」が開館、6年には「丸子劇場」が開場、11年には現図書館の前身ともいいうべき「丸子図書館」が丸子小学校内に設置されたほか、地元新聞（丸子タイムス）の創刊がされるなど、製糸業の発達と歩調をあわせ文化施設の設置、文化事業の開始があいつぎ、住民の文化に対する関心も深まりました。

そして、この風潮のなかで、豊富な資金を使い、九谷を始めとする焼物や、南画・水墨

#### 44. 土屋泉石作品

「花鳥図」紙本着色 110×43cm

#### 45. 収集品目録

池上秀歎・児玉果亭・中村不折等の軸、金・銀屏風などが列記されている。

画を中心とした絵画など、当時一流とされた美術品の収集をするものもあらわれたほか、これらの援助を受け、地域にも文化・芸術活動で活躍するものがあらわれます。

俳諧では、東京・芭蕉庵の伊藤松宇（上丸子）が、東京を中心に活躍しました。日本画では、信州の代表的南画家・児玉果亭の弟子の篠沢聯亭（塩川）、土屋泉石（上丸子）などが活躍しました。ことに泉石は、ハワイ滞在中に得た知識をもとにして、伝統の南画に水彩画の風味を加えた独特的の画風を完成させたほか、「世界相手の商工業は イト キイト サノサ……」で始まる丸子小唄の作詞・作曲をするなど、丸子を代表する文化人として活躍をしました。

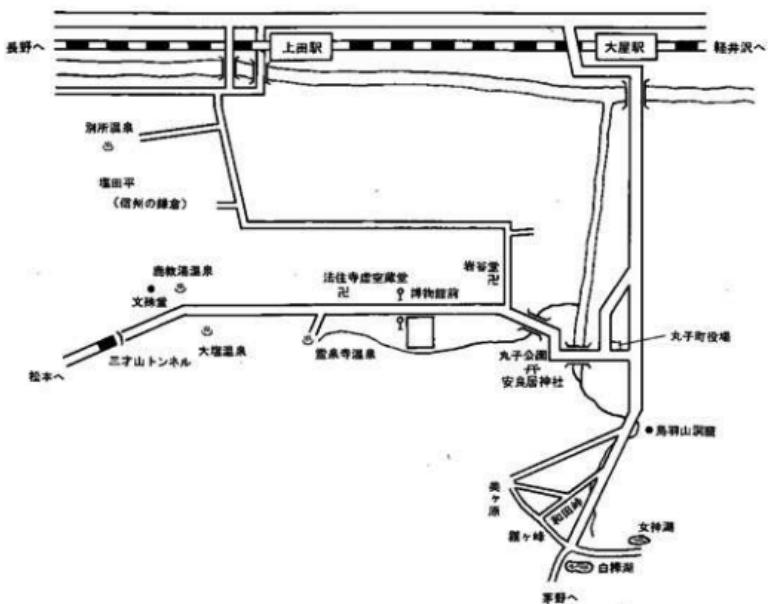


44



45

# 周辺道路地図



## 利用案内

■開館時間 午前9時～午後5時

(ただし、入館は午後4時30分まで)

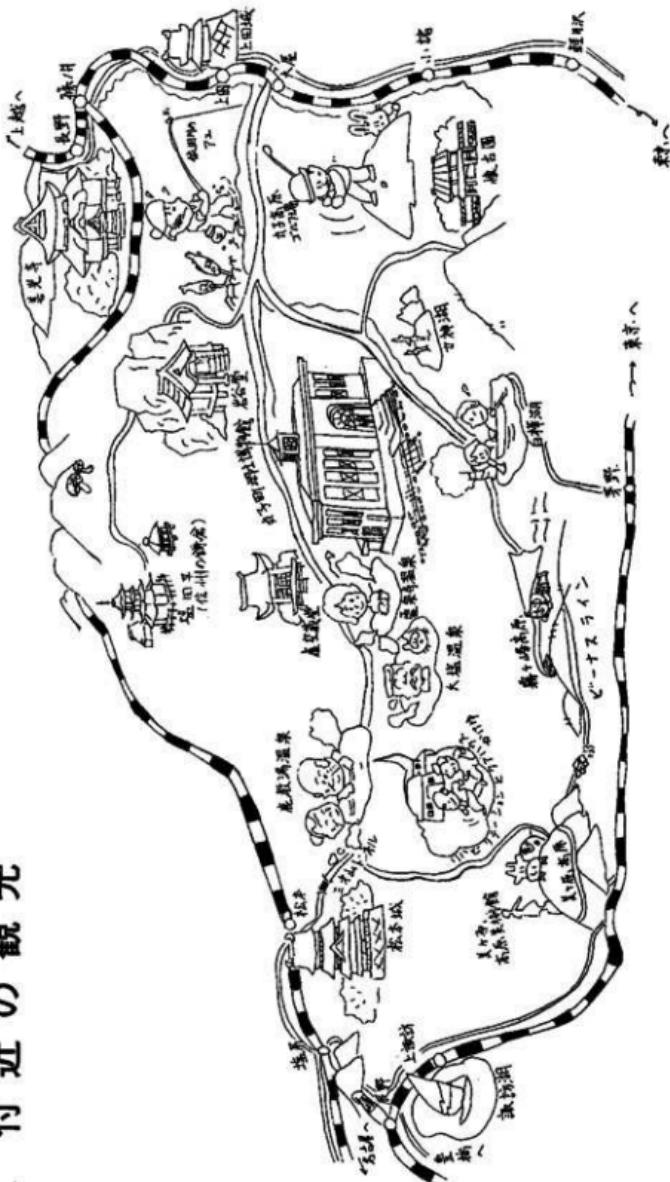
■休館日 每週火曜日の午後・水曜日

祝日・年末年始(12月29～翌年1月3日)

■入館料

	個 人	団体(10人以上)
大人 (高校生以上)	100円	80円
小人 (小・中学生)	50円	40円

## 付近の観光



## 展示協力者一覧

### 展示企画委員

加藤 有次	国学院大学教授（博物館学）
高野 豊文	長野大学教授（歴史地理学）
遠藤 恵三	長野県文化財保護協会会長（古建築・仏像）
黒坂 周平	長野県史刊行会主任編纂委員（地方史）
関 孝一	長野県教育委員会文化課指導主事（考古学）
山岸 謙	製糸研究家（器械製糸）
風間雅美（桜井広男）	丸子町小・中学校校長会長（学校教育）
酒井 昭水	丸子写真クラブ会長（写真・町民代表）
関 志う	丸子町婦人団体連絡協議会会長（町民代表）
小山 とみ	丸子町連合婦人会長（町民代表）

\* 役職は、委員就任時のもの

### 寄贈・寄託者並びに協力者・協力機関一覧 (順不同・敬称略)

関 孝一	加藤 一郎	小林 建樹
辰の口 区	長坂 康次郎	柳沢 かついい
土屋 進一	白井 美明	小林 文平
清住 進	倉島 許見	滝沢 雄
齊藤 夏子	小林 有輝	齊藤 光一郎
中山 正人	鈴木 安則	工藤 房徳
小林 朗	柳沢 倉	大久保喜八郎
綱島 たき	竹内 彦一	竹内 雄勝
滝沢 一彦	酒井 昭水	山岸 勝平
藤田 富雄	金井 勝久	黒坂 周一
山岸 忠	児玉 司農武	小穴 喜一
加藤 有次	永峯 光一	青木 豊
森山 公一	国学院大学	県教育委員会
県史刊行会	上田市教育委員会	和田村教育委員会
長門町教育委員会	武石村教育委員会	丸子中央小学校
長 泉 寺	法住寺	靈泉寺院
天竜寺	円融寺	向陽院
下和子 区	鍾紡京美人(㈱)	シナノケンシ㈱
丸子写真クラブ		

---

丸子町郷土博物館

昭和58年11月6日発行

発行者 丸子町郷土博物館

長野県小県郡丸子町大字東内2564-1

TEL 02684(2)2158

印刷所 信海書籍印刷株式会社

長野市西新田470

---

